

池清

へ遠 13 143
2257
2



繪本烈戦功記卷之二

目録

川中島合戦評論

耳槽景時流屏川待敵圖

川中島戰場之圖

軍配團扇之事

惠林寺什物之圖

山本勘介之事 兵法傳來

山本道鬼授兵道給馬場景昌圖

山本道鬼

兵法辨論



繪本烈戰功記卷之二



第

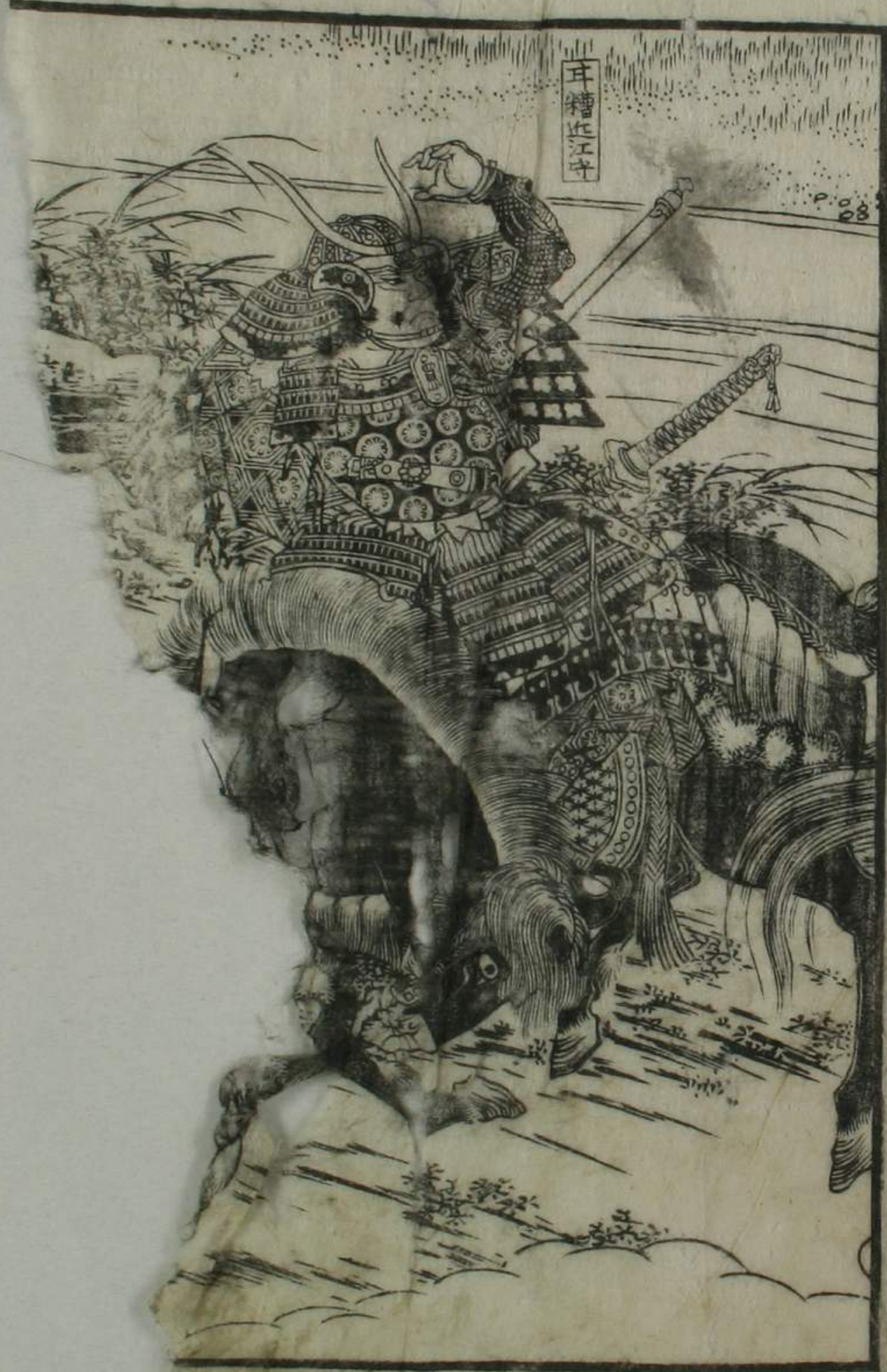
低川中島合戰評論

曠野に雲低て烟漠々として長江に風去て水溶々として旗影且
 散奴晃々として消狼煙眼裏に浮蘇波耳底に残り冷く冷くこれ
 を武田上校信及川中島の烈戦永禄四年九月十日の變天
 卯下刻より始り申の上刻より終つ終つ何れも古より
 陣論通に... 其是... 抑上校... 謙信...
 智勇拔群あり手准り干戈を交む只信去善是...
 武田入道信玄乃武畧絶倫なる手... 維新... 此有...
 謙信善是... 謙信犀川筑間川... 越後... 越後...
 西条... 海浜の城と搦崩さず海を... 信玄



敵 區

川中島合戦記



耳槽江守



石田

及單功譜卷之三

耳槽景時
 犀川
 活て敵を
 待て
 固

海津の言坂が海をと聞か

山のこけある下米々の後りよせぬ

海津乃故は兵とまゝめて上板が動

武田の援を臨く

若く八月廿四日より九月九日

家北兵士常気先返して

正奇とて竹麿進向と云

亦主命を受く向ふ

山本道鬼善地裡と得く

法は所謂正所以令也

勝利の要法

也。謙信炊煙と隨て其謀畧と察

出藩として西条山と下

武田のふ意と付其車懸と言

有毎の一戦乃速速又攻路

是は正兵の攻取

難信を助せ守

立るの一云を

而須更は依り変化して

烈戦を保乃依と為其箕子

竹麿

山本に命

防乃樹と後

鉄炮伎と箕子

竹麿

竹麿

竹麿

武田の言

敵

先鋒の發炮也。信玄旗本の發炮也。合の軍は立て、
箕の手に此の敵方突中て候。敵と軍將と急ていひ、
發炮と左右より歩中して、手槍等が防只發炮と時を
移り、先を此敵来るを待分る。是と待味方の候と、
て兵家の大事ととる。而る。奇と變而正とあり。先を此正と
奇と爲て敵の後と襲てん。是る危急と臨で軍陣一洗と
伏せにめ。級横自在ある事。實は古今の元帥なりと將士
率に至す。威敷やびといふ事。然る。大兼信。平不意有
討の奇策。圖は高く。城兵の懸威。破竹の。名。武田の
堅固。九儀す。擊崩し。信玄父子。負せ。典厩信繁
備角を。後山平。乃。鬼。初麻原。又。郎。木。の。別。兵。と。討。取。宴。よ

しやうが
木
几

敵

37

於く見則の謙信の智勇。信玄乃とよま。其勝頭。然とて
流う。批判。考ん
然とも。武田方十二。後の。依。九。儀。止。修。と。典厩。初麻。諸。角。山。平
其外。勇士。并。死。而。廣。瀬。乃。後。不。追。も。あ。ら。ず。者。影。の。い。も
飲。福。昌。宗。穴。山。俣。豆。上。枚。の。先。鋒。折。崎。本。左。が。依。と。切。崩し
大。郎。義。信。の。依。も。持。て。信。玄。も。亦。此。の。傷。は。些。や。も。退。く。代。謀
率。此。勇。士。冠。戦。と。い。は。れ。も。依。り。此。も。動。搖。せ。ば。け。時。越。方。ま。う
折。崎。が。次。又。謙。信。備。ら。れ。先。隊。の。合。戦。折。崎。小。は。依。り。一。戦
旗。本。を。以。信。玄。が。依。の。右。招。又。也。り。太。郎。義。信。が。四。百。餘。の。備。と
一。討。又。謙。信。玄。乃。持。布。へ。暮。夜。よ。身。の。入。進。ま。れ。ば。武。田。方。心。死
と。成。く。防。敵。味。方。四。千。餘。の。兵。入。り。と。持。戦。と。南。下。謙

武田力記卷之二

三

信着る所の星甲の緒と切て傍の深き井に糸の傍に
絆まじ。絆糸乃澄の上を筋貫つるに胸肩衣と着て放
生月毛の逸おと一散高。あつら總がらもよせよと云持て。只一騎
二尺六寸小豆長光の太刀とわげして花脩を棄入ると習の勇士
三十余人我しと切ぬ。武田乃近江。大將の故大幸あり
際お死せよと死おらあひは傷。謙信の信玄小娘を
眼と死く索らるる。信玄は丸より下知しをを死と
ん身烈風のどく索射らるる。同出立の武者も六人懸れ
をて。何まが信玄ある事給として見つけ。されども流石
乃謙信。威風と察と。あま丁と信玄あつら切先り。二太刀
まで切射る。信玄軍配團扇とて交向らふ。是れを武田

敵

鏡

札

三子

の勇士原大隅依奈回原又郎。土屋平八郎。尚の勢と打捨
信玄乃懸丸の湯と取囲一足もいへば防戦中も原大隅
信玄の持巻背貝の柄の槍追ひ謙信乃総角と見ゆ。此
仰ぎて碓と突けども実よあらを裏う。大隅は陰
うて籠もる。信玄より三途の三途のけくおちれた。馬は極へ
剣揚て通まら。け付謙信のを習十三騎と射向する。武田義
信も手とり八十余人は成る。備らるる。謙信大隅よと
もて蒐出らる。義信は故ありとて取囲く。松原に
て射謙信の十三騎も難くとも。義信謙信を死せしむ。謙信
太刀も屢有る。互に二ヶ所の痛み。支家の兵士並来て
中を隔く。お別せらる。是れを信玄

川内日記 卷之十一

武田の備と切崩し。宗徒乃勇士が討死。信玄は旗本河
 切入自身太刀斬り及て其信玄を退しうとすもあらず。上
 信玄は林の場を此も引ど欲富定山よく越兵が撃つ
 あまむ末武田乃總敗軍にあらず。上牧勝利の七八
 もえづれ敵。為奈山へ向しる。正兵衛来て。上牧の後隊より
 切崩し。申れ刻より。勝鬨を取つた。武田の
 勝利顕然。あまむ外刻は。信玄謙信太刀斬り。上牧方勝利と
 及利は再起て。小荷秋が切崩し。謙信
 高梨山へ引れ。武田の勝利あり。けつめ諸書は
 論。これをも信玄の勝利とす。今復勝者半々止唯宜哲人
 乃誓疑と後進し。

差別

とれども軍に於て。武田方と勝とせん。敵越方又武田を
 勇士若干討死。上牧方も亦討死あり。謙信武田の先を中しぬき。信玄の旗本を撃つ。速
 以故國は。宿志存。常然。大將乗
 馬と宗徒本道。善光寺の上の。敵三牧畑。敵
 引取。總勢亦四方は難散。故軍に。信玄は
 信玄苦戦。宗徒の勇士が失。芝居。退
 を退。終。全。勝鬨を。勝利あり。信玄は
 支軍。法有。武田家。張軍法。細。依
 四の法。善改。事。討。盛。手

え

勝岡の取柄にて世の勲を受んや。ま持國の大畧と云ふ。先
地と撰て方園八紘の政を備へ大将中央に立米將と云ふ
牀にみかす。たまた太刀圍扇。右より矢箭又太鼓貝の役は皆
武功を有者先が勲む。旗奉行を左の手に旗を付て伺候す
首帳儀終て危軍聲を發て軍機と云ふ事也。式共法最
密にして家々此法有武四方。此式と云ふの理は常々を
堂匹夫くの堂と撰國律の破し。並法に勝と云ふ。世に
名と傳ん中教と同川乃論ありんや。從者共斬り推く
信云い武備は精りる敗と云ふ。信信者權は教りる
其説と云く。智勇兼伎実り古今乃兩將と云ふ。其
武四方も持國を揚ぐれども味方より利あり。信云は負り

鏡

二夜月乃戦中頭取之れ殊は大将狼道城退のくん
兼信は負より。武篇の家尋常ある事か
の。信云は精りる敗と云ふ。信信者權は教りる
或書又信云牀に伎と切崩され上と摩川へ逃入也
兼信追蒐く後よ衆入切付られと記せり。予は流と
らべ摩川を川中流の小は流を。則耕後乃飯路也。い
愚將より中も我領國乃。道まなり。其地の事も大川
へ衆入。轉例と云ふ。況我信云は控と云ふ。或洋の
経論微細に記す。いあれ。猪殺限あまら。筆と止む。國
戦場の皮圖を以て文辭を并んく。宜觀察也。一

40 敵

川中流の小は流を

信及松代は一徳士也。曾云乃神出鬼没の妙と感田家の
記録よりして古人の口碑と探索して之を記。其中要と括て究
取の書肆に送る。其文御場

一
字下
信信武田の平政へ乗出る時信玄の傍にも二十人の到
兵有て是と堂の者と号皆歩立と成て信玄と守
護しひしが上牧の勇士切先并掃て殺入りつと此
二十人の到兵戻風乃りく立隔火花を散して防戦し
兼信遠と看くたの方へ乗出り。信玄乃林北へ乗出り
切先より又切付らるる。信玄勝敗を計らざる軍配圖
て清留又切付るを受留らる置け切付くくたる
七太刀あり。悉軍配圖扇くて受留らる三太刀切付らる

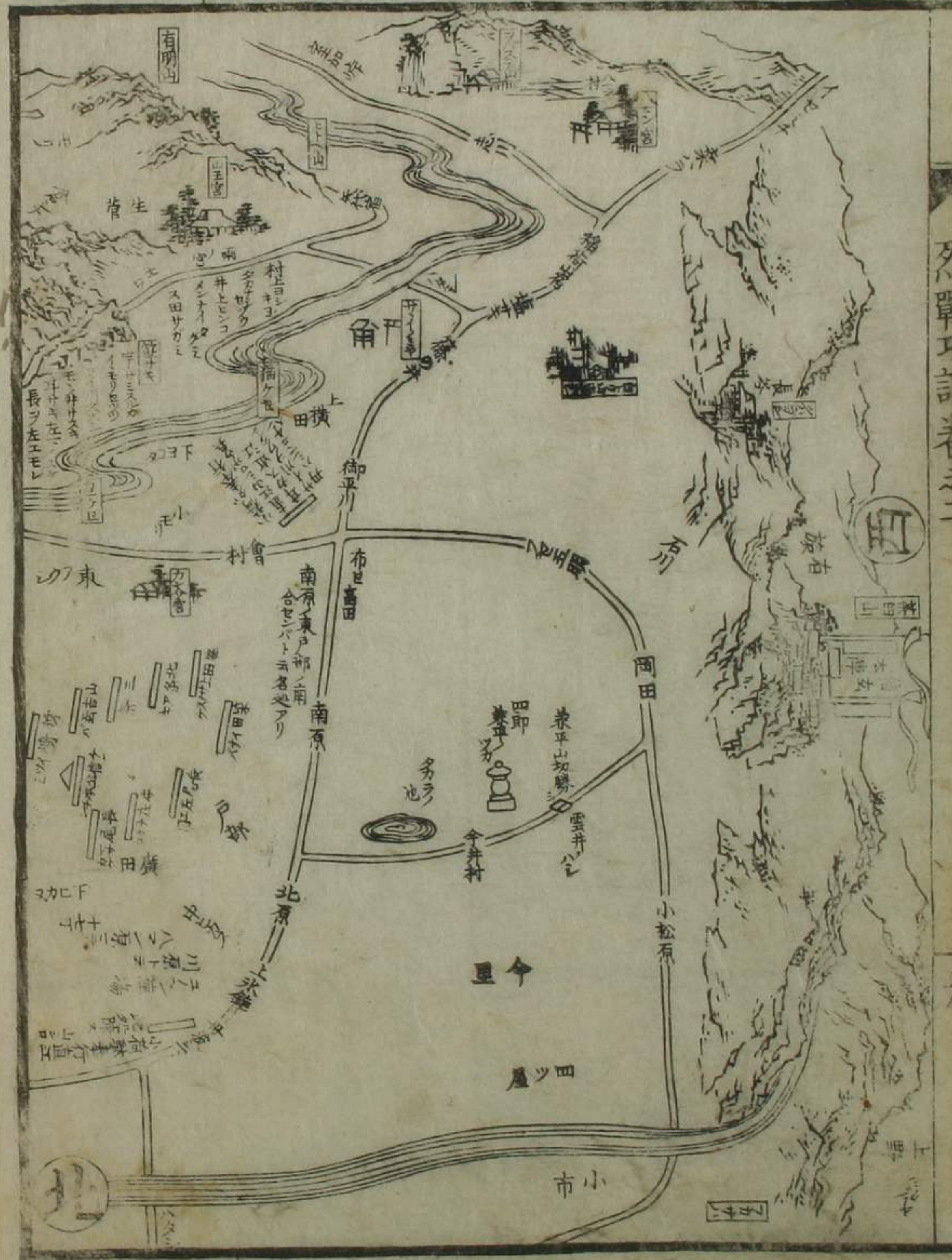
横

城受を引く。城を清らるる。厥場亦の今此小治田村
の辺にて八幡系の服也。今に其西の三太刀七太刀と号
て名取の云々をいひ松代よりを定むるなり。小治
當り水尻村と小治田村の間也。小治田村より二丁をり
隔りいひ小治田村を丁南とあれ。在然るなり。又摩川
筑間川の間に在幣川と中川を之。中平川と云村を有る
あり。中平川と中平川と名有り。其小治田
ら。其將幣川より其系入向浪と懸きて太刀打流と有
と亦て幣川より其後各
如斯其土地の好士の記さるる。関野軍記より後而考る。信玄
林北と勤まざるふあり。最必や。川中此太刀亦信用し難し

川中此太刀亦信用し難し



信州川中嶋戦場取圖



同日信謙信西条山に陣ありて。信玄二萬余騎を備
せしめ押通り猿ヶ子場さるがこばの山より高し茶磨山ちまろやまより上り。荒間
川の流るる所の文乃谷ふみのやに陣ありて是下に陣し。越後の糧乃運送
断し。越兵と綱裏つなうらを合し。最上の計策あり。果
上夜舞憂乃を足らぬ只信謙信快兵とて敵とあらず。信
謙と一瓜。信玄傳聞て信謙は海防の城より引られし臆せ
らるるの故。現
春日信謙信敵地より深く入り。西条山は惣然とあり。武田方
越後の通ぬ路を断切我師と吾人とあり。信謙信程の
名将兼而覚悟のこあり。是を知て然と死地は惣然と
有。信及旭の城主小柴元久内中より外上牧より志願通るの

者ありて。武田乃信謙に迫り。相圖以信謙と抜市の密計
有。手儲を彼背水かきそくに背く。越兵は必死を示し。猿ヶ子
時より取ん乃奇謀平。何れも信謙は挫り一割を保つ。こ
もつを。山幸道鬼城に陣する場依る武田の殊士を二云発
せり。信謙は海防の引のこを。是善共奇計と察
が故形察あり。最
同謙信炊煙は依て武田の計策を察度候を。武田中
信謙は信謙の智至る。信謙は信謙の智の故。信謙は
外聞出抜の子高岩密計して却而名譽の恐者悲付られ

武田信謙

十一

三途

于上藤信地方以看切て妻女山乃辺の小徑より兵と伏せる者
手前益嚴重小せしむ。九月十日の夜天すて武田方より
ざりしをり。何れも炊煙を察しそふ。藤信精利の根を
形り。また下りせ。武田乃將士苦戦ふら及ばず。乃乃の武
將あり。並にの兵士をりせば。甲軍悉く是西を異よとて
山を北妙算。武田の劉兵ふれ。つて。持てて。越後の敗と
ふ。至れり。兩將乃軍器率毛髪の遺ありんや。
同藤信太刀おの肘。亦大隅信玄の持槍と取て。突突し。外
なる。龍子より。乃三途と。おと。そ外信玄の。將死候せ
成て。傷と有。い。耐藤信。死。五。圍。く。討。と。る。や。殊。原。大。隅
大。到。の。者。と。有。如。何。に。取。隙。に。

三途

答。是。我。も。人。を。取。り。し。古。代。侍。の。物。緒。も。お。て。は。合。戦。乃。振。諸
家の。元。録。及。用。陽。軍。艦。あ。ら。ん。固。く。は。推。し。上。救。武。田。の
劉。兵。一。世。乃。烈。戦。に。て。將。も。士。率。を。必。死。と。救。而。ま。は。頭。と。や
ら。ぬ。の。隙。なく。勝負。一。瞬。の間。あ。ら。ん。藤。信。單。騎。り。て。信
云。が。あ。く。乘。付。れ。れ。も。款。味。方。た。ま。ぬ。ね。也。武。田。の。逆。計
堂。乃。者。も。藤。信。と。あ。ら。ん。子。只。胸。肩。衣。と。着。し。面。前。は。み。轉
の。る。よ。さ。ら。ん。武。者。先。先。う。けて。切。入。し。而。し。思。ひ。防。戦。ひ。也
藤。信。と。知。形。を。幸。遁。と。せ。ぬ。藤。信。も。亦。信。玄。と。慥。く。あ。ら。ん。は
兼。而。乃。憤。怒。烈。火。の。如。く。あ。れ。ぬ。飛。射。も。指。遠。ら。ん。は。思。ひ
同。山。の。武。者。救。軍。有。て。紛。と。し。信。玄。と。あ。ら。ん。は。思。ひ
平。乃。藤。信。名。馬。よ。り。振。撲。飛。流。の。如。く。あ。ら。ん。は。思。ひ。振。ら。ん

大将... 甲陽乃軍紀... 明辨... 此書... 二將... 將... 嘆...

軍配團扇之事

縦令

評し

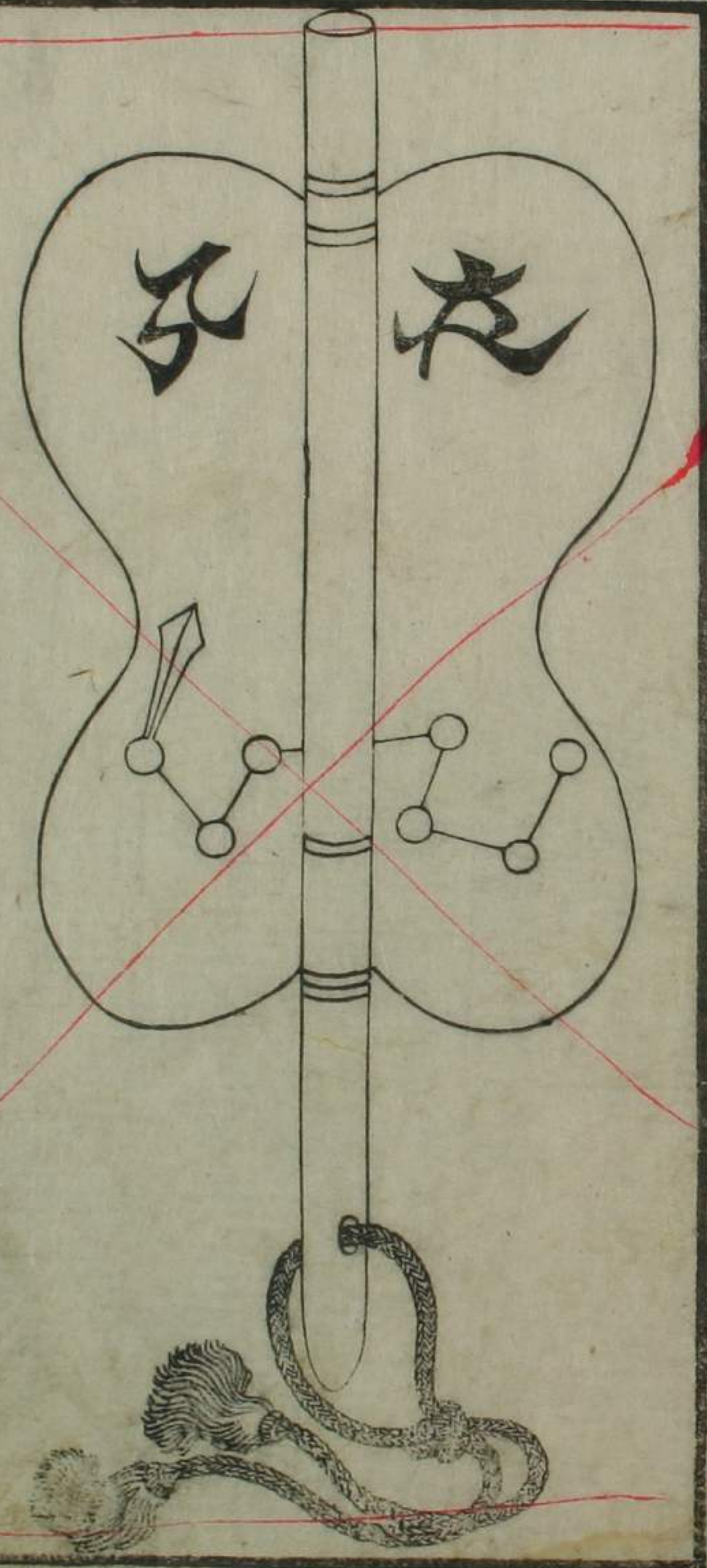
際

大将... 甲軍に敗... 湖の鬼... 群... 将も... 凡俗... 論... 事... の... 其... 取...

入教

國府を戦陣に具する所にて暑雨避の器と云遠へり是は矢立
 有懸の要器なるを將の用処を意に竹板を以て造紙簾
 以張へ幸器の意は遠くすとい半組終は出たり又或書は源頼
 義朝臣東夷を討つ時倭は大雨降く銃の蓋はさしあつた所
 國府を死く指揮を以て教給走しす源家の威威益成
 匡より往く其制法を立て軍監の用と守自理は通じて善
 軍法の利と助と成と有嫡家には傳ふるなり

丸は國とす所は信玄軍死國府へ甲兵惠林寺の什物
 也両面七厘と云金銀瑠璃碑礪瑪瑙珊瑚琥珀を以
 飾し其堅五寸馬皮を以て蒙



文武英才絶世雄 名家豈莫將門風 威光不没國扇賞
 原嶼翻旗五戰功 捲地神兵筑摩水 補天奇計下米宮
 太公秘書何足誦 甲陽軍鑿輝日東

種春題

山本勘助之幸 兵法傳來

永祿四年秋九月十日。信及川中將より於て。彼須史より受
 化して。謙信が不意の横兵を受備。智恵の山本勘助の名を以て
 代りて。あそむる。山本勘助入道乃鬼七ヶ谷。兵法は死しての
 鬼神をりて。信玄の名を承られし。を以て。天文二年武田
 信玄。十二女とて。未勝千代より。時。老臣小幡曰傳と。其もよ
 雪刃。浸して。冬。乃牛窪の村。蘆を妨る。をけるより。勘助
 遂に三世と約し。彼を分て。後諸國。河經廻る。事十年。天
 文十二年に。武田。甲府。は。杖。以。盟約の。武田家は。其の
 吏よりして。昼夜。信玄の。傍に。在る。兵法と。講し。治國の。要
 を。後。良臣。勇士と。と。あ。る。武田家。は。武備。を。益。し。盛。ふ。り。と。

領

軍陣法。令。嚴密。を。り。向。ふ。所。務。ど。と。云。事。あ。く。進。如。破。ら。れ。る。
 事。は。本。曾。小。笠。系。村。上。の。諸。將。は。亦。務。數。年。形。に。以。て。其。
 信。及。一。國。武。田。の。名。に。屬。と。山。本。の。名。名。四。海。は。雷。動。守。其。
 一。運。る。時。來。て。今。幸。冥。鬼。の。月。録。一。代。を。底。と。蒙。る。事。
 六。ヶ。所。將。士。率。に。進。る。進。備。ま。さ。る。あ。り。ち。る。山。本。勘。助。乃。
 鬼。が。得。る。如。の。兵。法。と。云。は。往。昔。人。皇。六。十。代。瓊。湖。天。皇。の。御。
 時。延。喜。の。子。乙。世。美。三。月。に。大。兵。宰相。大。江。雅。時。は。勅。して。善。
 儒。書。聖。經。賢。傳。兵。書。以。傳。之。事。及。之。を。秘。金。十。万。兩。を。以。て。
 ら。せ。て。異。朝。を。遣。り。の。人。雅。時。異。朝。を。著。し。て。より。先。妙。令。又。方。
 西。戎。唐。朝。の。天。子。昭。宣。帝。へ。献。て。も。成。り。の。儒。書。兵。書。悉。相。
 傳。と。し。て。其。も。云。給。保。備。し。て。通。せ。し。る。通。曉。し。て。續。明。

烈陣功訓卷之二

十六

論

承平四年。先王依而延堯。堯子より承平四年。追異朝。不
 尚學して。先王維三史。文選。通。其。後史の成功。又依之。軍去
 武。終。悉。そ。ん。と。善。其。要。法。と。熟。得。と。又。代。入。兵。越。の。王
 元。權。并。又。國。の。志。宗。延。又。綱。又。九。經。と。求。得。と。朱。雀。院。乃
 承平四年。午の己亥朔。文武の爵。又。初。在。以。補。佐。以
 又。兵。書。殺。失。と。著。先。と。訓。園。集。と。号。て。世。に。傳。ふ。然。も。悉
 兵。家。陸。陽。の。文。字。も。れ。ば。は。傳。在。而。の。後。得。事。也。と。守。惟
 附。六。世。乃。孫。也。大。に。匡。房。博。學。完。文。又。は。て。家。傳。の。兵。去。悉。熟。得
 と。其。頃。八。幡。太。郎。義。家。本。美。と。征。以。帝。獻。感。乃。あ。ま。皇。大。に。匡
 房。は。孫。也。兵。法。の。秘。書。を。義。家。に。傳。へ。と。ある。匡。房。は。孫。也。拜。一。齋。と。の
 こと。三。日。天。曆。二。年。戊。午。三。月。十。二。日。石。清。水。八。幡。の。廟。前。に。就。に。就。

以傳ふ所の兵法。義家。皆。傳。ふ。孫。家。に。合。身。新。羅。三。郎。義
 光。傳。子。傳。授。以。當。る。是。甲。及。武。田。の。祖。也。其。後。星。雲。と。傳。て
 都。河。川。の。鬼。一。法。眼。も。者。其。遠。法。以。得。之。と。ある。孫。精
 人。刀。湖。河。に。傳。ふ。表。と。し。軍。死。と。裏。と。し。神。出。鬼。没。最
 妙。と。守。之。は。孫。系。經。鞍。馬。の。坊。中。に。傳。仇。家。乃。平。氏。以
 例。と。ん。乃。志。あ。り。故。又。鬼。一。が。秘。と。る。所。の。兵。書。と。ん。す。其。の
 符。主。以。職。ひ。鬼。一。が。女。と。心。と。合。彼。兵。去。と。索。中。一。善。懸。結。と。く。以。遠
 以。本。曾。の。副。敵。平。家。に。大。軍。と。こ。れ。よ。り。平。氏。に。傳。ふ。其。後。捕。正。成。げ。書。と。用
 官。軍。又。而。勝。の。利。有。て。中。功。莫。太。也。日。向。玉。傳。來。在。左。系。の。勝。り
 捕。正。成。と。地。順。し。て。兵。去。悉。傳。ふ。子。孫。孫。孫。西。玉。と。在。て。兵。去。を
 備。ぞ。山。本。勅。助。而。遊。の。附。是。以。傳。授。し。て。善。孫。遠。に。傳。場。成

事い
はひ

於少捕系昌山本に附く学び猶道鬼が工まよふ所の軍法乃
 秘密城孔繩弦よひしる追皆修舟。信玄も亦乃鬼が兵備を
 得く我家の兵法を隠飾し凍法以般練しく四方に強敵と
 き武名雷動しく海西の緒將を破る。故に山を乃鬼とつた
 こと。軍法を信玄と馬場と遠まら。後世武田流の兵法と受
 稱とらふる是也
 武田信玄勅介と問る異國より傳來の軍書以開破るるをうり
 しくら係よ人数が積る夜を變化し波を布指同は練る様定令
 訂定る来成し。你修めいしとる。而修授はしと有勅介畏て
 命に依り軍法以呈見。信玄感心む。你軍書幾何問る。武
 と問る。勅助一軍も練らる。一文も通也と答中。亦らば軍法

兵制い何如して学得る乎と有よまの初つと又の口授を承兵
 去りし。又西國と作東氏又字びも。空しく学ん
 たり。其上年と般練いしいと答信玄。記憶費通の奇
 也。感し。よ軍師とやる。實又一文も通はして兵乃とめ
 百勝と掌はる。古今獨歩とい。匠中武田家七十八條乃
 法令を。治國の紀律はて。更そ学れ知る。い。所謂文
 章有者必有武備。有武事者必有文徳。宜武文と武と其名異
 ちりし。い。程一也。勅介一心練磨の功。自文道も通る。の
 手。あ。れ。も。是。凡。を。忍。の。乃。ふ。あ。あ。は。じ。り。

兵法辨論

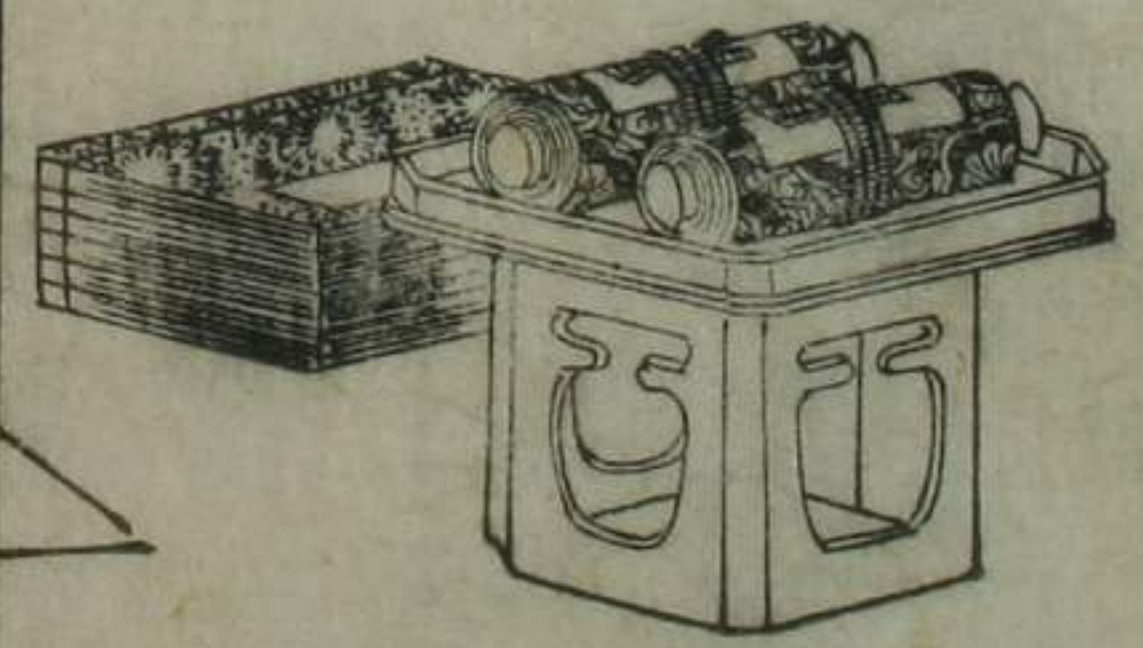
川中島合戦終く後小幡尾張守信定人し緒ちららる。あても



馬場景昌

山本道鬼
 馬場景昌
 兵道を授る
 の圖

山本道鬼



敵

軍配者と稱せし者瓜分せし外より人戸と押せ
其押し若のあつね中以外に出或い山のつらや
結末乃居る向人の山火と紫経たんと人の母を
立於軍配善般練しれども餘を以てかき奇特
也山幸助助が軍配せし並者也といどもかき奇特
奇特に身ごりの綱と合戦勝負其報の道理至そ
多成りたるの先人の遺すれ遠山は松明なる程
自分晴夜は松明事かきし附右軍配奇特な松明を
と照らしぬと敵向人の山に松明の附ありて
火の中を走りたる事おきかき奇特も用たるの

敵

大振の事へ中くあつた合戦一隊せん助助も原高も同
也是が諸士批判と曰同事なり奇特なるがま
云又一方も同事なり奇特なるがま
と云場民は少捕これと曰神変奇特なり
も人休も事なり武士が予箭のふる軍配と受て
武のふる事なり只奇特なり
乃如く思ふ也正法奇特なり
の信云十八戈よりて村上義清と合戦の
助甲及び事なりまより四ヶ月の秋村上を
く信云乃に属と是る山幸が軍配なる
合戦助助打死追更は神変奇特の用なり

あり。武道に於て奇特の異ひはも可也と明ぬす。これ功分が
 兵法軍記に於て實に離倫形練弓矢の智識といはば呂望瘦るり
 韓信亂るるる鬼が不具幸の事む事れありんや。その死跡は川中流
 柴村孫陀堂の所也と今猶一碑存又典既信繁の墳墓は杆刺村
 の寺中ニ在。寺典既寺と号す。信繁の弟は向文武秀
 且有彼の人也。曾考よ云これちり扱中へ信云云恩顧の者なれど
 此大率乃則は命令に代り討死する事と望と流。川中流合戦の附
 八百の兵乃將として。信云は旗幸の先は備られしが。越方の村と
 美濃清隅田右衛門尉安田上総介が二十乃別兵はあり。雷動して
 戦ふと云る。素今向と限と四ひ定められけり。併地は法華院の
 向孤書ふる。武田重代の視を解く臺と上米牌と取て指揮し

既も敗せんとするの味方なれば。一足も引かざりて討死有
 して。天晴際なき春霧なること。故も味方も感ドありやと。
 嗚呼信繁主將乃威徳ありて魏きたふよとあり。堂と云る。後
 文有武也惜武骨の化して黄壤一堆の下に朽ぬとも名止す。
 青雲九天の上ふき。

繪本烈戦功記卷之二畢

三

